

# 大学生の学習意欲，大学生生活の満足度を規定する要因について<sup>†</sup>

見館好隆<sup>\*1</sup>・永井正洋<sup>\*2</sup>・北澤武<sup>\*2</sup>・上野淳<sup>\*2</sup>

一橋大学大学院社会学研究科<sup>\*1</sup>・首都大学東京基礎教育センター<sup>\*2</sup>

学生の「学習意欲」や「大学生生活の満足度」は，どのような要因が押し上げているのか．想定される様々な要因を探るアンケートを公立 S 大学の学生に実施し，その結果から因子分析によって「学習意欲」「大学生生活の満足度」に影響を与えていると想定される因子を抽出した．そして抽出された因子間の因果関係を共分散構造分析にて分析した結果，「教員とのコミュニケーション」は「学習意欲」を高め，さらに「大学生生活の満足度」にも影響を与えていた．また，「友人とのコミュニケーション」は「大学生生活の満足度」にあまり影響を与えておらず，「学習意欲」には関連がないことが示唆された．

キーワード：学習意欲，コミュニケーション，大学生生活，友人関係

## 1. 背景

2007年12月，中央教育審議会大学分科会は，顕著な少子化・人口減少の趨勢の中，各学校段階で最低限必要な知識・技能を身に付けさせること，若者が人生の階梯を着実に歩んでいく仕組みを再構築すること（いわゆる「キャリア教育」）の両方が重要であることを提言した．具体的には，学士過程の「入口」では「大学全入」時代を迎え，教育の質を保証するシステムの再構築が迫られている（教育再生会議 2007）とし，その一方の「出口」では経済社会からイノベーションや人材の生産性向上に寄与することが強く要請されている（経済同友会 2007）としている．特に後者のキャリア教育については，大学進学者のうち卒業する者の12.4%が進学も就職もしないまま卒業しており（文部科学省 2007），将来働くことについて気がかりがある高校生は7割を超え，高校生の保護者の47.2%が「将来の職業との関連」，40.9%が「就職の状況」を重要な

進学情報だとしている（全国高等学校 PTA 連合会・リクルート 2005）．つまり大学における「キャリア教育」の取り組みが，高校生及びその保護者が進学する大学を選択する際の重要な条件になりつつある．

しかし，言うまでもなく大学の目的は，授業や研究活動を通して学生に知識・技能を身につけさせることである．前述した大学に求められる需要の大きな二つのパラダイムシフトに対応しつつ，大学教育の本分を見失わない唯一の方法は，学業に意欲的に取り組むことが，大学生生活の満足度に繋がり，ひいては将来のキャリアにも繋がることを明示することに他ならない．先行研究においても「学習意欲」及び「大学生生活の満足度」が「将来のキャリア」に影響を与えていることを示している．永野（2002）や梅崎（2004）は，成績が良いほど，就職活動が成功しやすくなることを指摘している．また，佐々木（2003）は，就職の決定・未決定は就職活動への主体的取り組みに相関があり，その主体性は学業の達成感，すなわち学習意欲と有意な相関があると示唆している．さらに，諏訪部・矢野（2005）は，工学部の卒業生に質問紙を送付して，現在の仕事と大学生活とのレリバンスを調査した結果，学習意欲が大学生生活の評価すなわち満足度に影響していたこと，そして，渋谷・矢野（2005）は，学習意欲から現在の仕事における知識獲得へと強い関係が結ばれ，ひいては仕事満足度にも影響を与えていることを指摘している．

では，「学習意欲」及び「大学生生活の満足度」に影響

2007年11月7日受理

<sup>†</sup> Yoshitaka MITATE<sup>\*1</sup>, Masahiro NAGAI<sup>\*2</sup>, Takeshi KITAZAWA<sup>\*2</sup> and Jun UENO<sup>\*2</sup> : Some Factors Determining Students' Motivation to Study and Their Satisfaction in University Life

<sup>\*1</sup> Hitotsubashi University, 2-1, Naka, Kunitachi-City, Tokyo, 186-8601 Japan

<sup>\*2</sup> Tokyo Metropolitan University, 1-1, Minami-Osawa, Hachioji-City, Tokyo, 192-0397 Japan

を与えている要因は何だろうか。まず一つ目として挙げられるのが、「教員とのコミュニケーション」である。北尾・速水（1986）は動機づけを規定する要因を、「学習者」「課題や教材」「教員」の3つとしている。その中の「教員」について考えた場合、教え方はもちろん、それ以外に教師における子供達一人一人の性格や心理を掌握的確さ、また教師のパーソナリティや態度も大きく影響を与える要因と考えられると指摘している。また、作田（2007）も「教員とのコミュニケーション」が「学習意欲」に大きく影響を与えると指摘している。具体的には、教職履修学生が大学在学中にどのような要因で自らの能力を伸ばしたのかを分析した結果、「自分からすすんで学習する」「知らないことや分からないことを積極的に調べる」「社会での出来事・時事問題に関心を持ち情報を得る」「資料や情報に基づいて自分の意見を表現する」の4項目で構成された「知的活動力」が、「授業の内容について教員に質問をする」「授業中にディスカッションをする」で構成された「学問的関与」と、「大学教員とよく談笑する」「授業以外で担当教員と相談したり話をする」で構成された「教員への関与」が大きく影響しているとしている。

二つ目として挙げられるのが、「友人とのコミュニケーション」である。山田ら（1980）は、九州大学の卒業生に対して「大学生生活の満足度とその理由」を分析した結果、大学生生活で重要なことは「学業」もさることながら「友人・先輩・後輩のふれ合い」が大きな要素を占めると示唆している。鈴木・藤生（1999）は「友達人数」及び「友達との良い経験」が「大学満足度」と相関関係にあることを指摘している。市川（2001）が「あいつには負けたくない」「あの人を目標に頑張ろう」といったライバルに対する「自尊志向」、また、グループ学習において「人間関係を悪くしたくない」といったメンバーに対する「関係志向」が学習動機に繋がると指摘している。ただし、「友人とのコミュニケーション」が「学習意欲」に直接影響を与えている先行研究は見出されなかった。

もちろん、「学習意欲」及び「大学生生活の満足度」に影響を与える要因は、対人関係以外にも専攻や授業の内容、図書館やコンピューターなどの学習環境、クラブやアルバイトなどの課外活動、経済的状況など複数存在する。しかし本研究においては、対人関係、特に大学という固有の環境において看過できない「教員」「友人」という二つの要因それぞれが、どのような因果関係において「学習意欲」及び「大学生生活の満足度」

に影響を与えるのかに注目してみる。

ここで本研究における「学習意欲」「大学生生活の満足度」の定義を確認しておきたい。まず、「学習意欲」については、溝上（1996）は学習意欲（学習動機）を心理学における外発的動機づけ・内発的動機づけに分類でき、前者では授業の出席点など学習自体が目的ではなく、単位を取るための手段となり、授業もただ受けているだけとなりがちであると指摘している。よって、本研究における「学習意欲」の定義は、褒美や賞賛がなくとも課題遂行することそのものに興味・関心を持って自発的に動機づけられる「内発的動機づけにおける学習意欲」とした。次に「大学生生活の満足度」については、夏休みや休日などに行う短期的なイベントで得られる充実感を除外したいと考えた。よって本研究における「大学生生活の満足度」の定義は、学業など日々長期間努力した結果生まれる「学業及び日々の大学生生活における充実感から起こる満足度」とした。

## 2. 目 的

前述した先行研究を俯瞰すると、「教員とのコミュニケーション」が「学習意欲」へ影響し、「学習意欲」は「大学生生活の満足度」へ影響し、ひいては「将来のキャリア」へと繋がるのが推定できる。また、「友人とのコミュニケーション」が「学習意欲」に直接は影響せず「大学生生活の満足度」に影響していることが推定できる（図1）。

ただし、「大学生生活の満足度」が「将来のキャリア」にどのように影響しているのかに関しては、現在在学中の学生が学部卒業後の調査結果を経年分析することで確かめる必要があるため、本研究においては除外し

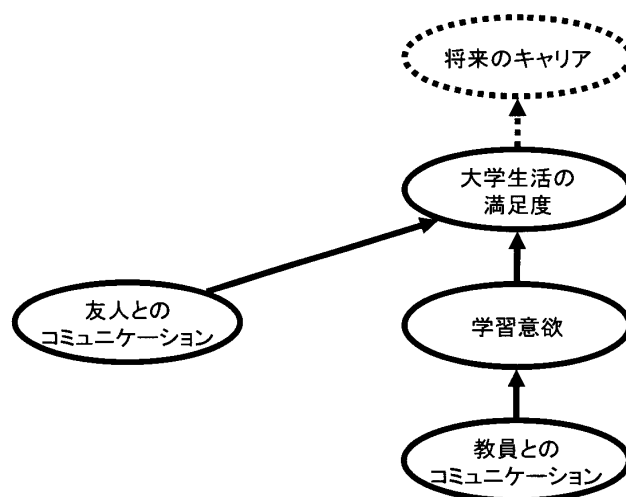


図1 本研究の分析モデル

今後の課題とする。よって、本研究の目的は、図1から「将来のキャリア」を除いた部分の因果関係、すなわち「教員とのコミュニケーション（以下、教員コミ）」が、「学習意欲」に影響を与え、そして「大学生活の満足度」にも影響を与えていることと、「友人とのコミュニケーション（以下、友人コミ）」が「学習意欲」には影響せず、「大学生活の満足度」にのみ寄与していることを検証することである。

### 3. 方法

図1の分析モデルを検証するために、まず公立S大学の学生を対象に「学生の意識と行動に関する調査」（表1）を質問紙法にて実施した。設問にはあらかじめ「学習意欲」「大学生活の満足度」「教員コミ」「友人コミ」「将来のキャリア」に関する項目をセットした。次に、因子分析を行い因子間の関係を明らかにしつつ、共分散構造分析を用いて因子間の因果関係を検証した。なお、アンケートを実施した学生は1・2年生のみとした。その理由は、調査を実施した当時、公立S大学は発足2年目であり、3年生以上は旧大学の学生支援の影響を受けると考えたからである。

ここで「学習意欲」「大学生活の満足度」「教員コミ」「友人コミ」を測る設問項目の妥当性について順に述べる。まず「学習意欲」の観測変数としてQ1「勉強時間」Q2「読書冊数」Q3「学習への能動的姿勢」を設定した。林（2008）は、学生の学習タイプと勉強時間の比較をした結果、「自分のレベルにあった授業をして欲しい」学生よりも、「授業は難しくてもチャレンジなほうがいい」学生のほうが、授業以外の勉強時間に費やした時間が長い反面、「授業・実験」に割く時間が少ないことを示唆している。よって「内発的動機づけにおける学習意欲」を測る設問として、授業や実験以外のQ1「勉強時間」を設定した。また同様の理由で、受動的ではないQ3「学習への能動的姿勢」を設定した。さらに、前述した諏訪部・矢野（2005）が、「大学時代の読書量」「大学時代の学業優劣」「大学時代の学業その他に対する熱心度」が学業活動に関する評価と相関し、就業後の経験・姿勢に役立っていることを示唆している。本研究においては「将来のキャリア」の分析は行っていないが、今後の経年分析に備えて「大学生活の満足度」を介して「将来のキャリア」へと影響を与える「学習意欲」を測定する項目と

表1 「学生の意識と行動に関する調査」設問(将来のキャリアに関する設問を除く)

<p>■「学習意欲」を測定する設問</p> <p>Q1. 【勉強時間】授業時間以外に1日平均どのくらいの時間を勉強や研究の為に個人的に費やしていますか。</p> <p>Q2. 【読書冊数】1ヶ月平均、あなたは何冊ぐらいの単行本を読みますか。専門書に限りません。ただし雑誌やマンガは含めません。</p> <p>Q3. 【学習への能動的姿勢】授業や課外活動その他(学外活動を含む)の場で何かを学ぶとき、自分の頭で考え、問題意識を持ち、自分なりに知識を積み上げるような能動的な姿勢で学んでいますか。 ※5段階尺度</p> <p>■「大学生活の満足度」を測定する設問</p> <p>Q4. 【学習の充実感】現在の大学での授業や実験、自習等を含めた勉強は、あなたにとって充実したものとなっていますか。 ※5段階尺度</p> <p>Q5. 【大学生活の充実感】この1週間の生活を思い出してください。どのような内容であれ、「毎日が充実している」と感じますか。 ※5段階尺度</p> <p>■「教員とのコミュニケーション」を測定する設問</p> <p>Q6. 【教員との相談(学習)】授業や研究上のことで教員に質問したり、討議したり、相談したりしていますか。 ※4段階尺度</p> <p>Q7. 【教員との相談(大学生活)】授業や研究以外のことで、教員と話したり、相談したりすることがありますか。 ※4段階尺度</p> <p>■「友人とのコミュニケーション」を測定する設問</p> <p>Q8. 【学内友人数】大学の中に個人的な事柄を相談できる友達は何人いますか。</p> <p>Q9. 【学外友人数】大学の外に個人的な事柄を相談できる友達は何人いますか。</p> <p>■その他、「大学生活の問題点」や「本学の長所・短所」を測定・考察する設問</p> <p>Q10. 【大学生活の問題点】学生生活で何か問題点となることはありますか。あるとしたら、この中のどれですか。あてはまるものを全て選んでください。1)とくに感じない、2)経済的なこと、3)友人との関係、4)家族との関係、5)教員との関係、6)成績や単位、7)将来の進路、8)自分の健康、9)その他(自由記述)</p> <p>Q11. 【大学生活の不安の相談相手】学生生活で誰かに相談したいこと/困ったことはありますか。あるとしたらどなたに相談しますか。あてはまるものを全て選んでください。1)相談したいことは特になし、2)家族、3)友人・知人、4)教員、5)学修カウンセラー、6)就職カウンセラー、7)教務課、学生課、就職課等の職員、8)その他、9)誰に相談していいかわからない</p> <p>Q12. 【本学の長所】本学のどういう点が良いと思いますか。(自由記述)</p> <p>Q13. 【本学の短所】本学のどういう点を改善してほしいと思いますか。(自由記述)</p>
---

して Q2「読書冊数」を設定した。

次に「大学生生活の満足度」の観測変数として Q4「学習の充実感」Q5「大学生生活の充実感」を設定した。前述した諏訪部・矢野（2005）の他、坂田ら（2007）が「学業満足度」と「大学生生活の満足感」との相関の有意性を示し、さらに、國眼ら（2005）が「大学入学後の学業に関する満足度」と「大学生生活の充実度」との相関の有意性を示していることから、Q4「学習の充実感」を「大学生生活の満足度」を測定する項目として設定した。また、日本私立大学連盟学生部会（2000）が、大学入学後の満足度は大学生生活の充実度と密接に関連していることを示唆していることから、「大学生生活の満足度」を測定する項目として Q5「大学生生活の充実感」を設定した。

次に「教員コミ」の観測変数として Q6「教員との相談（学習）」Q7「教員との相談（大学生生活）」を設定した。前述した作田（2007）は、「授業」「授業以外」両方において教員とのコミュニケーションが学習意欲に有意であることを示している。また前述した坂田ら（2007）が、新入生オリエンテーションにおいて「教員との親密化」がそのプログラムの「獲得感」及び「満足感」へと繋がっていることを示し、その「教員との親密化」を測る設問が、「先生と親しくなれた」「先生との会話が楽しかった」など必ずしも学習だけに留まらない教員との関わりの有意性を示していることから、学習に関する相談（Q6）と大学生生活に関する相談（Q7）に項目を分けて設定した。

最後に「友人コミ」の観測変数として Q8「学内友人数」Q9「学外友人数」を設定した。前述した通り鈴木・藤生（1999）は「大学生生活の満足度」と「友人数」が有意な関係にあることを示しており、さらに今回の調査対象が1・2年生であることから、高校時代の友人と入学後親しくなった友人との影響を今後経年分析するために、友人数を学内（Q8）と学外（Q9）に項目を分けて設定した。

なお、Q10「大学生生活の問題点」Q11「大学生生活の不安の相談相手」Q12「本学の長所」Q13「本学の短所」については、考察時の手掛かりを得るために設定した。

## 4. 結果と考察

### 4.1. 調査項目の分析

2006年11月13日～24日に実施した「学生の意識と行動に関する調査」のサンプル数は2,610であった（回収

率：79.0%）。表2は「学生の意識と行動に関する調査」の単純集計結果を示したものである。以下、この結果から示唆されたことを記す。

まず、「学習意欲」を測定する設問の結果に着目すると、Q1「勉強時間」や Q2「読書冊数」に関しては、数字の多寡に関しコメントできないので、引き続きデータを取得して経年変化を見ることが必要である。しかし、Q3「学習に関する能動的姿勢」に関しては、平均値が3を上回っており、知識・能力の獲得に意欲的な学生が多いことがわかった。

次に「大学生生活の満足度」を測定する設問（Q4「学習の充実感」Q5「大学生生活の充実感」）の結果に着目すると、両者は平均値が3を上回り、学習を含めた大学生活に充実感を得ている学生が多いことがわかった。

「教員コミ」を測定する設問（Q6「教員との相談（学習）」Q7「教員との相談（大学生生活）」）の結果を見ると、約半数の学生が質問・討議・相談をしていることが明らかになった（「全く無い」がそれぞれ

表2 「学生の意識と行動に関する調査」結果

【学習意欲】	
Q1勉強時間	平均1.28時間(1日)
Q2読書冊数	平均2.02冊(1ヶ月)
Q3学習への能動的姿勢	平均値3.57※①
【大学生生活の満足度】	
Q4学習の充実感	平均値3.06※②
Q5大学生生活の充実感	平均値3.54※③
【教員とのコミュニケーション】	
Q6教員との相談(学習)	平均値1.74※④
Q7教員との相談(大学生生活)	平均値1.63※⑤
【友人とのコミュニケーション】	
Q8学内友人数	3.65人
Q9学外友人数	4.43人
【その他】	
Q10大学生生活の問題点 (複数回答)	将来の進路・・・52.8%, 成績や単位・・・45.0%, 経済的なこと・・・29.8%, 友人との関係・・・19.1%
Q11大学生生活の不安の 相談相手(複数回答)	友人知人50.3%, 不安無し29.4%, 家族25.0%, 誰に相談するかわからない6.9%, 教員6.2%
【注】※①能動的だと思う:5～どちらかと言えばそう思う:4～どちらとも言えない:3～どちらかと言えばそう思わない:2～そう思わない:1と数値化した平均値 ※②③充実している:5～どちらかと言えば充実している:4～どちらとも言えない:3～どちらかと言えば充実していない:2～していない:1と数値化した平均値 ※④常にしている:4～時々:3～たまにしている:2～全くしていない:1と数値化した平均値 ※⑤よくある:4～時々ある:3～ほとんどない:2～全くない:1と数値化した平均値 ※⑥非常によくある:4～よくある:3～時々ある:2～全くない:1と数値化した平均値	

48.6%・57.9%)。

また、「友人コミ」を測定する設問（Q8「学内友人数」Q9「学外友人数」）の結果から、学内より学外の友人数の方が多く、高校時代などからの友人の方がまだ多いことが推察された。

最後に考察時の手掛かりを得るために設定した設問の結果について記す。Q10「大学生生活の問題点」に関しては、低学年ながら将来への不安を半数以上が持っていること、同じく成績や単位に関しても半数近くが不安を感じていること、約3割が経済的な問題を抱えていることが示された。また、Q11「大学生生活の不安の相談相手」に関しては、将来や成績に関する不安が多いにも関わらず、最も相談すべき教員よりも友人が多いことが示唆された。この点からも、「教員コミ」が「学習意欲」「大学生生活の満足度」に対し、有意な影響を与えていることを確認する比較要因として「友人コミ」が最適であることがわかる。さらに、自由記述であるQ12「本学の長所」Q13「本学の短所」に関しては、「教員コミ」に関する指摘が述べられ、教員とのコミュニケーションの在り方に関する課題が示唆された。

#### 4.2. 因子の抽出と因子間の関連の分析

次に、目的とする「学習意欲」「大学生生活の満足度」「教員コミ」「友人コミ」の4つを測定するために設定した設問間の因子分析を行った。主因子法を用い、プロマックス回転を行った結果の因子パターンを表3に示す。

第一因子（Q1・2）には学習意欲に関する質問項目が抽出されたことから、因子名を「f 学習意欲」と命名した。同様に、第二因子（Q3・4・5）を「f 大学生生活の満足度」、第三因子（Q6・7）を「f 教員コミ」、第四因子（Q8・9）を「f 友人コミ」と命名した。結果、学習意欲を測るために設定したQ4「学習に関する能動的姿勢」が「f 大学生生活の満足度」に分類された点以外は想定通りとなった。なお、各項目の信頼性については、クローンバックの $\alpha$ 係数による内部整合性を検討した。結果、「f 学習意欲」（ $\alpha=.28$ ）、「f 大学生生活の満足度」（ $\alpha=.58$ ）、「f 教員コミ」（ $\alpha=.71$ ）、「f 友人コミ」（ $\alpha=.69$ ）となった。ここで、「f 教員コミ」と「f 友人コミ」も $\alpha$ 係数が.70前後となり、信頼性はほぼ確認できた。しかし、「f 大学生生活の満足度」は.58、「f 学習意欲」は.28と低い値であったことから、次回調査時により高い信頼性が得られるような項目を検討することが、今後の課題として示された。

表3 因子分析の結果

	f 教員 コミ	f 友人 コミ	f 大学生 生活の満足度	f 学習 意欲
Q1. 勉強時間	-0.007	0.024	-0.007	0.707
Q2. 読書冊数	-0.035	0.014	-0.008	0.276
Q3. 学習への能動的姿勢	0.097	0.020	0.334	0.131
Q4. 学習の充実感	0.033	-0.076	0.580	0.156
Q5. 大学生生活の充実感	-0.047	0.046	0.744	-0.165
Q6. 教員との相談 (学習)	0.911	0.000	-0.029	-0.049
Q7. 教員との相談 (大学生生活)	0.609	0.002	0.046	0.015
Q8. 学内友人数	0.013	0.812	0.025	-0.005
Q9. 学外友人数	-0.010	0.654	-0.024	0.038

因子抽出法：主因子法、回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法  
寄与率(回転前)：因子1=19.8%，因子2=12.6%，因子3=6.9%，因子4=4.7%

表4は因子間の相関を示したものである。結果、「f 教員コミ」と「f 大学生生活の満足度」( $r=.371$ )、「f 教員コミ」と「f 学習意欲」( $r=.456$ )、及び、「f 大学生生活の満足度」と「f 学習意欲」( $r=.344$ )に、弱～中程度の相関が認められた。一方、「f 教員コミ」と「f 友人コミ」( $r=.002$ )、及び、「f 友人コミ」と「f 学習意欲」( $r=-.052$ )には相関が認められず、また、「f 友人コミ」と「f 大学生生活の満足度」( $r=.203$ )は弱い相関であった。

以上の結果より、「f 友人コミ」は「f 学習意欲」「f 大学生生活の満足度」の両方にあまり関連していないが、「f 教員コミ」は「f 学習意欲」「f 大学生生活の満足度」の両方に関連していることが推察された。

#### 4.3. 因子間の因果関係の分析

上述の因子間相関の結果から、前述した仮説の分析モデルの因子間の因果関係を共分散構造分析にて検証した。具体的な手順として、因子分析によって抽出された4因子を潜在変数とし、設問項目を観測変数としてパスの解析を行った。モデルの推定には最尤法を用いた。また、モデルの評価にはGFIとCFI、及びRMSEA

表4 抽出された4因子間の相関

	f 教員 コミ	f 友人 コミ	f 大学生 生活の満足度	f 学習 意欲
f 教員コミ	1.000			
f 友人コミ	0.002	1.000		
f 大学生生活の満足度	0.371	0.203	1.000	
f 学習意欲	0.456	-0.052	0.344	1.000

を用いた。これら適合度指標については、豊田(1998, 2007)の示す妥当と判断されている数値を目安とした。結果、GFI=0.989 (>0.9), CFI=0.971 (>0.95), RMSEAが0.046 (<0.05) の適合度を得たモデルが作成された(図2, パスはすべて5%水準で有意)。

ここで、観測変数 Q3「学習への能動的姿勢」について述べると、因子分析の結果、その変数は潜在変数「大学生生活の満足度」に属していたが、「学習意欲」の観測変数として定義した。その理由として、Q3の設問は「授業や課外活動その他(学外活動を含む)の場で何かを学ぶとき、自分の頭で考え、問題意識を持ち、自分なりに知識を積み上げるような能動的な姿勢で学んでいますか」であり、文意から「学習意欲」へ分類すべきと考えたためである。この判断は、統計的に抽出された結果だけで解釈するのではなく、実質科学的知見に基づく解釈が重要であるという豊田(1998)の指摘に基づくものである。また、「学習意欲」の観測変数から Q2「読書冊数」を削除した。理由は Q2を削除した場合のクロンバックの  $\alpha$  係数による内部整合性が、Q1または Q3を削除した内部性合成より高かったためである(Q1削除:.165, Q2削除:.306, Q3削除:.285)。

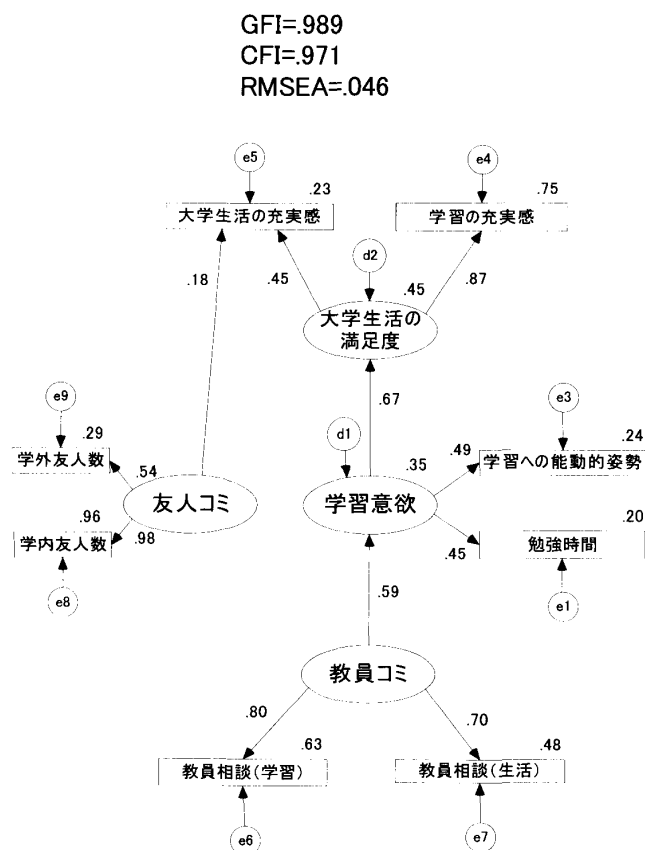


図2 4因子間の共分散構造分析(最終モデル)

なお、表4の因子間の相関に基づき、潜在変数「友人コミ」から潜在変数「大学生生活の満足度」へ引いたパスの係数より、潜在変数「友人コミ」から観測変数「大学生生活の充実感」へ直接引いたパスの係数の方が高くなった(「友人コミ」→「大学生生活の満足度」のパス係数=.08, 「友人コミ」→「大学生生活の充実感」のパス係数=.18)。さらに、GFI, CFI, RMSEA 全ての適合度も高くなった(「友人コミ」→「大学生生活の満足度」と引いた場合の適合度: GFI=.981, CFI=.944, RMSEA=.064)。

潜在変数「友人コミ」からのパスが、「学習の充実感」を観測変数として持つ潜在変数「大学生生活の満足度」ではなく、観測変数「大学生生活の充実感」へ直接有意に引かれたことにより、「友人コミ」は「学習意欲」とは関連が無いことが示唆された。

以上、共分散構造分析の結果、「教員コミ」から「学習意欲」へ有意なパスが引かれたため(パス係数=.59)、教員とのコミュニケーションが多くなると「学習意欲」が高くなることが示唆された。また、「学習意欲」から「大学生生活の満足度」へも有意なパスが引かれたため(パス係数=.67)、「学習意欲」が高まれば、「大学生生活の満足度」も高まることが示唆された。よって、「教員とのコミュニケーション」が、「学習意欲」に影響を与え、そして「大学生生活の満足度」にも影響を与えたとした仮説通り、「教員コミ」が「学習意欲」へ影響し、「学習意欲」は「大学生生活の満足度」へと影響するといった因果関係が示唆された。一方、「友人コミ」が「大学生生活の満足度」にあまり影響を与えておらず(パス係数=.08)、「学習意欲」には関連がないことが示唆された。

## 5. まとめと今後の課題

本研究では、公立S大学の「1・2年生」を対象にした調査を行った。その結果から、「教員とのコミュニケーション」が、「学習意欲」に影響を与え、さらに、「大学生生活の満足度」に寄与していることを明らかにした。また「友人とのコミュニケーション」が「学習意欲」に影響を与えておらず、さらに「大学生生活の満足度」にもほとんど影響を与えていないことも明らかにした。

本研究における今後の課題は、以下の4点である。

第一に本研究は1大学を対象とした分析であった。複数の大学において、本研究と同じ設問を設定し、大規模に実施することが困難である。しかし、本研究と類似した他大学の調査結果と比較検討することが課題

として挙げられる。

第二に学部別に見た分析が必要である。表5は自由記述欄 Q12「本学のどういう点が良いと思いますか (1044件)」と、Q13「本学のどういう点を改善してほしいと思いますか (1373件)」の結果から「教員とのコミュニケーション」に関する記述を抜粋し、学部別に分類したものである。この結果から、長所短所両方に「教員数」「熱心さ」「距離感」が挙げられており、明確に学部間の差が出ている。特にG学部は、キャンパス移動の影響が色濃く出ている（G学部は1年生と2年生以上が別キャンパスに分かれ、担当教員は2年生以上のキャンパスに研究室を持つ）。学生と教員とのコミュニケーションを促進する方法を検討する上で、それぞれの学部ごとの違いを把握することが重要である。

第三に「学習意欲」「大学生活の満足度」の観測変数として設定した設問項目の見直しが必要である。次回調査時により高い信頼性が得られるような項目を検討することが今後の課題として挙げられる。

第四に「友人とのコミュニケーション」についての再検討が求められる。本研究では、「学習意欲」「大学生活の満足度」にあまり影響を与えていなかったが、例えば「同じ志向を持つ集団（クラブやサークル仲間・勉強仲間・ゼミ仲間）」や「メンターの役割を持つ上級生」「ロールモデル」などといった「集団の質」での分析ができていない。また、山田ら（1980）が考察の中で位置づけているように、「友人とのコミュニケーション」をそのまま「大学生活の満足度」に繋げるのではなく、「学生同士の相互支持・相互啓発」といった集団を媒介とした概念と「大学生活の満足度」とを繋げる分析モデルを検討する必要がある。また、本調査対

象が低学年であったために影響が見られなかった可能性もあり、次年度以降の3、4年生の調査結果を注視する必要がある。

以上、次回調査では上記課題を鑑み、設問を精査しつつ、さらに教員と学生とのコミュニケーションが活性化する支援を構築するための手だてを追究したい。さらに、将来的に就職や大学院進学を決定した学生のデータが揃った時点で経年分析を行い、今回の分析から除外した「将来のキャリア」と「大学生生活の満足度」との相関及び因果関係を明らかにして、図1の分析モデルの検証を行っていききたい。

### 参 考 文 献

- 中央教育審議会大学分科会（2007）学士課程教育の再構築に向けて（審議経過報告）  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chuchu4/071017/001.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chuchu4/071017/001.pdf)
- 林未央（2008）現代学生のプロフィール。IDE-現代の高等教育, 498 : 16-22
- 市川伸一（2001）学ぶ意欲の心理学。PHP 新書
- 経済同友会（2007）教育の視点から大学を変えるー日本のイノベーションを担う人材育成に向けてー  
<http://www.doyukai.or.jp/policyproposals/articles/2006/pdf/070301.pdf>
- 北尾倫彦・速水敏彦（1986）わかる授業の心理学ー教育心理学入門。有斐閣、東京
- 國眼眞理子・松下美知子・苗田敏美（2005）文系学部生の大学生活満足度・充実度と職業イメージとの関連ーキャリア支援のための予備的検討ー。金沢大学大学教育開放センター紀要, 25 : 69-84
- 教育再生会議（2007）社会総がかりで教育再生をー公教育再生への第一歩ー（第一次報告）  
<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouiku/houkoku/honbun0124.pdf>
- 溝上慎一（1996）大学生の学習意欲。京都大学高等教育研究, 2 : 184-197
- 文部科学省（2007）平成19年度学校基本調査
- 永野仁（2002）大学生の就職行動とその成果。日本労務学会誌, 4(1) : 56-63
- 日本私立大学連盟学生会編（2000）ユニバーサル化時代の私立大学ーそのクライアントの期待と要望。開成出版、東京
- 坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮・川上正浩（2007）新入生オリエンテーションにおける獲得感と大学生

表5 自由記述抜粋（教員とのコミュニケーション）

学部(種類)	長所			短所		
	教員数	熱心さ	距離感	教員数	熱心さ	距離感
A(人文社会)	9	5	3	1		2
B(法)	6	2	2	1	1	2
C(経)	3			11	10	1
D(理工)	9	3		2	6	2
E(環境)	6	2		3		
F(システム)	2		1		8	2
G(医療)	1年	1			2	2
	2年	1	9	1		
	37	21	7	18	27	11

※G学部のみ2年生よりキャンパス移動があり学年別に集計

活満足感との関連性について. 大阪樟蔭女子大学  
人間科学研究紀要, 6 : 45-54

作田良三 (2007) 教職履修学生の「社会人としての資  
質能力」. 大学教育学会誌, 29(1) : 146-154

佐々木栄 (2003) 大学生の職業選択における学生生活  
の影響—就職決定者と未決定者の内的要因につい  
て—. 筑波大学大学院教育研究科カウンセリング  
専攻修士論文抄録集 : 13-14

渋谷友和・矢野眞和 (2005) 工学系大卒者の学習暦と  
仕事生活. 工業教育のレリバンズ 平成14~16年度  
文部科学省科学研究費補助金・基盤研究 : 57-84

諏訪部久美・矢野眞和 (2005) 工学系大学教育に対す  
る評価とその構造. 工業教育のレリバンズ 平成14  
~16年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研  
究 : 19-56

鈴木由美・藤生英行 (1999) 女子大生の友人数と自己  
効力について : 大学満足度と過去の友人関係を  
中心として. 日本教育心理学会総会発表論文集,  
41 : 744

豊田秀樹 (1998) 共分散構造分析[入門編]—構造方程  
式モデリング—. 朝倉書店, 東京

豊田秀樹 (2007) 共分散構造分析[Amos 編]—構造方程  
式モデリング—. 東京書籍, 東京

梅崎修 (2004) 成績・クラブ活動と就職—新規大卒市  
場における OB ネットワークの利用, 大学教育効  
果の実証分析—ある国立大学卒業生たちのその後.  
日本評論社, 東京, pp.29-48

山田裕章・冷川昭子・峰松修 (1980) 学生生活の研究 :

卒業後から見た大学生活の満足度. 健康科学, 2 :  
155-161

全国高等学校 PTA 連合会・リクルート (2005) 第2回  
「高校生と保護者の進路に関する意識調査」報告  
書 Part1

[http://shingakunet.com/career-g/data/data/200601  
20\\_report01.pdf](http://shingakunet.com/career-g/data/data/20060120_report01.pdf)

### Summary

What factors are responsible for boosting students' interest in study and their satisfaction in their university life? Students at this university were polled on various possible factors. We analyzed and sampled the survey results in order to fully examine any causal relationship between samples, based on structural equation models. It was revealed that communication between teachers and students stimulates students' eagerness to study and influences their satisfaction in university life. It was also suggested that students' relationships with friends neither significantly affects their satisfaction in university life nor is closely linked to their motivation to study. A future task will be to find clues for providing support to activate communication between teachers and students.

KEY WORDS: MOTIVATION TO STUDY, COM-  
MUNICATION, UNIVERSITY LIFE, RELATIONSHIPS  
WITH FRIENDS

(Received November 7, 2007)